



動物図鑑③

コウモリ

佐竹やぶろう

ハンピは辺鄙な田舎だった。かつてはヴィジャヤナガル王国の首都であり、十六世紀に迎えたその最盛期には南インド一帯を支配する大帝国だったが、十七世紀半ばには滅亡した。

今ではそこは昼間でもひっそりと静まり返った小さな農村だ。村の周囲には岩だらけの荒野が広がっており、所々に豆腐のような形をした巨大な岩が、まるで巨人が空から気まぐれに撒いたように何の秩序もなくゴロゴロと転がっている。村の中心にはかつての宮殿の遺跡があり、眩暈がするほど深く掘り下げられ何十段もの階段に取り囲まれた深い沐浴場が地面に大きな口を開けている。ただ、その土木技術の並はずれた正確さのために、かえってただの近代的な貯水施設にしか見えないのが残念だが……

宿から村の中心までは遠かった。リキシャをたのむこともできたが、歩いていくことにした。しかし炎天下の曲がりくねった道は予想外に長い。直射日光が真上から降り注ぎ、どこにも影がない。辺り一面は真っ白の岩と砂で、眩いばかりに輝いている……

道の脇に象の姿をしたガネシュの像があり、その横には美しい石でできた巨大なリングがあった。私はプシュカールで出会ったバックパッカーにこんな話を聞いた。インドでは、何かのきっかけで道端に、例えば謎めいた形の石が置かれたとすると、たちまちあちこちからお供え物が集まってきてその周りに並べられる。山吹色の花や色とりどりの色粉で飾り立てられる。そして瞬く間に立派な祭壇へと成長するのだ。そしてある日、それらの雑多な品々がごっそりと取り払われて、かわりに立派なリングが立てられる。こうしてインド中の道端にはリングが次々と増えていく……

リングへと向かう小道の分かれ目にはバナナ売りのおじさんがいた。灌木の日陰の中に、大きな葉っぱを敷いた上にしゃがみ込んで、女郎蜘蛛みたいに辛抱強く客が来るのを待っている。

その斜め向かいにはサトウキビのジュースを売る若い男だ。太いサトウキビの幹を二枚の歯車の間に押し込んで、手でハンドルを回して絞り、さらにレモンを中に挟み込んで絞り、そうやって何度も折りたたんでは最後の一滴まで絞り切る。昨日も飲んだその爽快な甘さに魅せられて、私は今日も飲むことにした。

少々不潔でも気にしないことだ。これからの一生を、アメーバーとつき合っただけ暮らしていくのも悪くない……

それにしても、暑い……

風が吹くと余計に暑い。体温より熱い風だから……

熱風ファンの下で乾燥されるキノコになった気分だ……

水分を取り忘れたら、あっという間に乾燥致死だ……

実際、夏休みを利用してインドにやって来てからというもの、暑さのことしか考えられなかった。寺院の高い塔も、赤い石でできた巨大な砦も、それに古い町並みや、色とりどりのサリーを身にまとう女たちなどの風物も、どうも頭の中に定着しない。この圧倒的な暑さの前ではどこか非現実的で、夢のように意識の前面を通り過ぎては消えてしまう……

白濁した甘い汁を飲みながら私は男に話しかけた。

「暑いね」

男はにこやかに笑い、首を横に振る。これはインドでは肯定の仕草なのだ。

「いつもこんなに暑いのか？」

「ああ。でも僕は慣れてるからね。ノープロブレム」

「どこか涼しい所知らない？」

「影にいるといいよ。家の中とか」

「そうだね……」

確かに日向を歩き回るから暑いのだ。見ると、男はちゃんと大きな木の影の中にその移動式の店を構えている。

「昨日、川で船に乗ってきたよ。おわんみたいな丸い船。知ってる？」

男はゆらゆらと首を横に振った。

「とても興味深い。あの船は大昔からあるの？」

男はまたゆらゆらと首を横に振った。あまり他の職業のことには興味がなさそうだった。

私はコップを男に返すと歩き出した。

寺院にやってきた。

寺院は塀に囲まれ、塀には門がついていた。その門は白く、巨大だった。上に行くほど狭まった台形をしたその門にはおそらく何かの華やかで血なまぐさい物語に基づいたさまざまな人や神や動物が刻まれている。

門を入ると、白い石で作られた馬車のようなものと、やはり白い石でできた本殿が見えた。本殿は何層もの石の基台の上に乗っていて、豪華な彫刻を施した屋根が数本ずつまとめられた透き通るように白く冷たい石の柱で支えられている。それらの石の柱を指で叩くと美しく澄んだ音がする。それらはみな、建築物というよりはバカでかい彫刻だった。人がその中に入って、住んだり遊んだりできる彫刻物だ……

柱の間をさらに奥へ行くと、壁に暗い穴が開いていた。その穴は窓もなく閉ざされた部屋に続いているようで、入り口はそこだけのようなだった。恐る恐る中に頭を入れると、何かが顔を掠めて飛び去っていった。

コウモリだ……

その穴倉のような暗い部屋はかつてはなんだったのかは分からないが、今ではコウモリのすみかとなっているようだった。ネズミが鳴き交わすような声と幽かな羽音がする。そして私の頭と開口部の枠の間のほんのわずかな隙間を、コウモリたちは文字通り目にも止まらぬ速さで飛びぬけていくのだった。

私はコウモリたちがぶつからないようにと、おそらく無駄に頭を下げながら、真っ暗な部屋に入った。強烈な臭いが鼻を打つ。コウモリの糞や尿の臭いなのだろう。天井で何かが絶え間なくうごめいている気配がする……開口部から差し込むわずかな光を頼りに私は奥へ進んだ。

部屋は奥に向かって長ぼそく、まん中に太い柱があって、手で触ると、やはり彫刻がされている。その周囲を回廊が取り巻いている。床には溝が掘られていて、溝ぶたがしてあるが、所々ふたが取れてなくなっているようだ。床にはコウモリの糞が堆積し、歩くたびにさくさくと音を立てる。その糞を食べる昆虫たちもそこにいるはずだが、暗くて何も見えない……

私は奥の壁に辿りつくと、そこにあった石の台の表面を手で触って確かめてから、腰を下ろした。辺りは真っ暗で、自分の体さえ見えない。コウモリの鳴き声、ときどきブルブルと体を震わせるその気配だけが感じられる。私は目を閉じてみた。まったく何も変わらない。本当にまぶたが閉じているのかもあやふやで、私は手の平を目の前にかざしてみたが、それさえも正しい位置にあるのかどうか分からなかった。

じっとしていると自分の体がどんどんあやふやになり、溶けていってしまいそうで、私はときどき体を揺すり、音を立てて自分を確認しようとした。しかし、やがて少しずつ闇にも慣れてくる……私はその場にじっとして、意識を自分の体の内側に向けた。腹は？痛くない。頭は？熱もないし、大丈夫。暑さは？それほどでもない。どこかに空気の通る穴があるのか、どちらかといえばそこは涼しかった。体の点検が終わると、私は耳を澄ました。そして日本で殺してきた男のことを観照した。

実家の近所に住む男だった。大学は長い夏休みに入り、私には何の計画もなく、友達もなく、実家に帰ってただブラブラしていた。男は私の見知らぬやつで、もちろん幼馴染でも、かつての同級生でもなかった。ただ不気味に、家の前でストーカーのように私を待ち、声をかけてきたのだ。

最初はヤクザかと思った。なにか因縁をつけて金を脅し取るつもりなのかと。男は笑ってはいてもその後ろには酷薄な、人類全体を憎み切ったアナキストのような表情がいつも置かれていた。男がどうして私を知り、私に目をつけたのかも分からない……結局、男は私を自分のいいなりになる子分のようににして、苛めて楽しみたいのだろうと私は当たりをつけた。

男はさまざまないたずらを私に仕掛けてきた。ある時は、ウソをついて乾燥材の粉を私に飲み込ませた。別の日には、私に子供じみたバカみたいな嫌がらせをして、私が抵抗すると急にむきになり、持っていたボールペンで私の手の平を突いた。流れる血を見て私も逆上し、男に仕返しをしようとしたが、男は手の届かないところに逃げてへらへらと笑うばかりだった。

まったく何なのだろう……男はまるで小学生のように幼稚で、ヤクザのようにすれ切っていた。しかし、男は私を奴隷にしたかったのか、それとも友達になりたかったのだろうか……あのようにならなくなってケンカをするというか、じゃれあうことが、男にとっての情愛の表現だったとしてもいうのだろうか……いずれにしても、それは通常の間には理解できるようなものではなかったし、私も理解しなかった、したくもなかった。それでも私はどこかで男を求めていたのだろうか……私たちは互いを憎みあい、軽蔑しあい、生理的にも嫌いあっていたのだが、男はしつこく私を追いまわし、私もなぜか男につきあった。

そしてある日、私の家で飼っていたクロという犬が死んだ。獣医によれば、何か悪い物を食べたのだろうということだった。中学のときに飼い始め、ずっといっしょに暮らしてきた。私が大学のある町に下宿するようになってからは両親が世話をしていた。歯を悪くしたり、少し歳をとり始めてはいたけど元気だったから、何の理由もなく死ぬはずはない。もちろん、私は確信していた。あの男がやったのだ。あの男なら、人が愛する動物を殺すことに下司な喜びを見いだしたとしてもおかしくはない……

その日、男は私を町の外れに連れていった。そこは大昔には大きな池があり、私が子供のころここに引っ越してきた時点では、すでに干拓されて田んぼになっていた。やがて減反政策のもと、それは田んぼから畑になり、さらには切り売りされて、工場や学校が建ち、中央に太い道路が作られて、今では郊外の産業団地として開発されている。しかしそこそこにはまだ、かつてと同じ農地と、干拓地の面影が残っている。例えばこの水門だ。男が私を連れていったのはそんな水門の一つだった。幅三メートルほどの農業用水をせき止めるように水門があり、まん中には大きなまらいハンドルがついていて、人の手で回して門を下ろすようになっている。辺りは草ぼうぼうの荒地で、子供のころにはよくフナやザリガニを釣りにきたものだった。

夏の盛りだった。朝の九時を過ぎると容赦なく太陽が照りつけて、気温はさっさと三十度を越えた。私と男は自転車でその水門に向かった。道は未舗装の土の道で、乾ききって穴だらけの白い土が、私たちの後ろで細かい煙になって舞い上がった。

水門には誰もいなかった。太陽が真上から照りつけるようで影がなかった。男はあの水門の上を渡ろうと私を誘った。私は、男があの水門の上で私に何かをしかけてきて水路に落とそうとするだろうと、ほとんど淡い希望と共に予感した。そうしたら逆に男を水の中に落とすやろうと心を決めて、私は水門の上に出た。

錆色の水門は陽に焼かれて熱かった。ハンドルにつながるねじ切りされた軸には黒いグリースがたっぷりと塗ってあった。私は水門を軽々と渡った。逆に渡って自転車の方に帰ろうとすると、男が邪魔をしてきた。私が水門の中央のハンドルを握っていると、男はその手を外そうとする。それで、私はその時をねらって足で一発、男の腹に蹴り込んだ。男は水に落ちた。

もう二週間も雨がなく、道も荒地もこんなに乾燥しているのに、いったいどこから来るのか、水路には豊富な薄緑色の水が音を立てて流れていた。男はしゃがれた声で何か叫んだが、すぐに流れのなかに飲み込まれ、その濡れた黒い服が遠ざかっていくのが見えた。私は男が見えなくなるのを見届けてから、男の自転車も水路の中に落とそうとしたが、少し考えてから思い直し、そのままにしておくことにした。

私は自分の自転車に乗って水門をあとにした。最後に一度だけ振り向くと、炎天下の道端に、男の自転車だけがぽつんと取り残されるようにして、帰らぬ主人を待っているのが見えた。

家に着くと私は何事もなかったように薄暗く涼しい風の通る台所へ行き、冷蔵庫から飲み物を取りだしてそれを飲んだ。そのときすでに、自分があそこで見たものすべてが幻か陽炎のようにしか感じられなかった。そもそも、そんな男が本当に実在したのだろうか……私が二階の自分の部屋に上がると、急に雲行きが怪しくなってきた、激しい夕立が降り始めた……

そのときだった、私の頭にインド旅行の計画がふと浮かんだのは。それから私はその計画に夢中になり、すぐに旅行会社に連絡をとって、一週間後にはインドに向けて出発したのだった……

.....私は寺院の奥の暗闇を漂いながら、頭の奥でジーンと金属が振動するような音を聞いていた。もはや私は身体感覚だけでなく、時間や方向、足の下にあるはずの地面の感覚さえ失っていた。頭がふらつく、体が揺れる.....そして、気がつくとは私はコウモリとなって石の天井からぶら下がっているのだった。

なにやら騒がしい音がする。見ると、周囲では仲間たち、いやおろらく親類縁者たちだろうか、がやはり同じようにぶら下がり、何か興奮して体を動かしている。

何事かと思っていると、突然となりの男がぱっと羽を広げて飛び立った。あっという間に見えなくなる。男に続き、親類縁者たちが次々と飛び立っていく。すると、私の意思とは無関係に、私もまた飛び立った。自分がこれからどこへ行って、何をするのかも知らずに。

狭い開口部からさっと身を翻して外に出る。体が勝手に動いて透き通った石の柱をすばやく避け、重い石の天井の下から抜け出ると、外はもう夕闇に包まれていた。広くゆったりとした空気の流れ、無数の家に帰る鳥たちの鳴きかわす声とさらに数え切れない数の小さな昆虫たちの幽かな羽音を感じながら、親類縁者たちの群れに交じり、私は空を昇った。地上は急速に遠ざかり、薄暗闇の中に沈んで見えなくなる。私の前にはただ青黒い光に満たされた、どこまでも広がる空気の固まりが広がっていた。

その鈍く青い光の中心に暗い影が映った。私にはそれが蛾だと分かった。蛾は鱗粉だらけの灰色や茶色や煉瓦色の羽を細かく羽ばたかせ、太い眉毛のような触角を動かしている。その薄い縞模様に入った太い胴体のもぞもぞとうごめく様が、私にはありありと感じられた。避けようとして、しかしそんな意思とは反対に体がしなやかに動いたかと思うと、一瞬後には蛾は私の口の中に入っていた。その胴体を細かい歯で噛み砕きながら私は吐きそうになったが、吐き気を感じたのは心だけで、体の方はさっさと獲物を飲み込むと、すぐに次の蛾を探しているのだった。

私の周囲にはおびただしい数の蛾たちが飛んでいた。見えはしないがそのことが分かった。私は次々と蛾を追うと、それを捉え、口の中で噛み砕いていく。その行為に体毛を逆なでされるような嫌悪を感じていた心もやがて少しずつ麻痺してきた。私はただ機械的に蛾を追った。腹の中に次々と噛み潰された蛾がたまっていくのが感じられた。やがて腹がくちくちになると、私はふらふらと空から降りて川の岸に生えている一本の木の枝にとまった。

それは寺院のすぐ横を流れている川だった。辺りは半ば砂漠のような乾いた土地だということに、川には豊かな水が流れ、白濁する水が、豆腐のような白く巨大な岩のまわりで渦やこぶを作っている。巨大な岩盤がその中に、自然のバルコニーとなってせり出している。岩盤の表面はなめらかに削れていて歩きやすく、日中にはときどき観光客が、あの椀のような形をした船に乗るためにそこにやってくる。ただ、ときどき大きなムカデが岩陰から姿をあらわすから注意が必要だ……とかいう話を、私はいつどこで、誰から聞いたのだったか。

もちろんもう陽も落ちて、夕方から夜になろうとするこの時間には川岸には誰もいなかった。私はその木の枝に、人間の感覚から言えば「逆さまに」ぶら下がり、川が流れるのを眺めていた。川面を見ていると、ふとこの川が、そのまま実家の近くのあの農業用水につながっているような気がした。コウモリになるぐらいなら、そんなことがあってもおかしくはなかろう……そのそも、あそこでおぼれ死んだのは男だったのか、それとも私だったのか？自分が殺したのか、それとも殺されたのか？自分はいったい誰なのか？……それさえも分からなくなってきて、ますます黒ずんでゆく夜の闇と混乱の極みの中で私は手を離し、すると初めて体が意思通りに動いて、私は川に落ちた。